

## 亀井孝著『日本語学のために』

こまつ ひでお

一九六九年六月のある日の午後、わたくしは、法政大学の大教室の椅子にすわって、「圏外の精神 Hugo Schuchardt」と題する、亀井孝氏の講演にのみをかたむけていた。

日本語学会からの通知状をてにしたとき、わたくしには、SCHUCHARDT というなまえが、はっきりとおもいだせず、H. PEDERSEN の『十九世紀の言語学』にかれの写真をみいだして、かすかに、以前、それについてよんだ記憶をよみがえらせたにすぎない。M. L. WIC の『言語学の動向』をみて、この言語学者が、新文法学派とたもとをわかって独自のみちをあゆみ、特に、言語の混淆に関するかれの学説は、比較言語学者たちの伝統的なかんがえかたとするどく衝突するものであって、しかも、現在もおお、その領域における古典としての価値をうしなっていないというたぐいのことをしりえたが、公開講演にのぞんだわたくしの予備知識は、せいせい、その程度にすぎなかった。したがって、この題目のもとに、どのような内容の講演がなされるかという期待というよりも、むしろ、講演者の魅力にひかれてそこに出席したのである。

はなしが、Hugo Schuchardt-Brevier についで、そして Brevier 所収の諸論文をつらぬく個人主義へとすすんでゆくにつれて、この

講演が、ただ、ひとりのすぐれた言語学者についての紹介だけを目的としたものでないということがわかってきた。なぜなら、SCHUCHARDT を主語としてかたられることもが、講演者自身の、研究者としてのありかたをそのままのがたっているようにおもわれたからである。SCHUCHARDT に対する批判めいたことばが最後まできかれなかったことも、この講演者の旺盛な批判精神をよくしているつもりはわたくしにとって、きわめて印象的であった。この講演をきいて、わたくしのむねにわきおこった疑問は、なぜ、亀井孝氏が、自己の学問のうちがわについて、いま、はっきりとかたる気になったのかということであった。

その翌年の『言語研究』五七号に、この講演の全容が掲載されたので、ゆっくりよみなおすことができた。そこには、亀井氏が、すでに六十歳にちかづいていることがのべられていたり、また、「懐旧の情」というようなことばもみいだされはしたが、単なる感傷が、亀井氏をして、このようなことどもをかたせたとはいかんがえにくく、もっとふかい、なんらかの肉面的な動機がなければならぬとおもわれたが、それを明確には把握できなかった。

その印象的な講演から約二年たって、「亀井孝論文集Ⅰ」として、

『日本語学のために』が刊行された。そのなかの論文の排列をみて、わたくしは、はっとした。日本語学——亀井孝——圏外の精神。そこには、この言語学者の半生のあゆみと、そのひとつの決算とがあることに気づいたのである。

『日本語学のために』は、この著者による既発表の諸論文のなかから、日本語の言語学的研究にかかわる原理的なことがらをあつかったところの、つぎの十四篇（ほかに付録一篇）がおさめられている。各論文とも、随所に加筆がみとめられるが、論旨にまで変更のくわえられているものはない。

日本語学のために（一九三八年）

現代国語学思潮の素描（一九三八年）

日本語とその研究との背景（一九五四年）

国語と民族性との問題（一九三九年）

国語問題と国語学（一九四七年）

日本語の現状と術語（一九四八年）

文法体系とその歴史性（一九三六年）

共時態の時間的構造（一九四四年）

「音韻」の概念は日本語に有用なりや（一九五六年）

意味のはなし（一九五八年）

「最善の音韻論的解釈は一つしかない」という作業仮説に対して（一九五八年）

「て（一）はいかなることばなりや」（一九七〇年）

「ソシュールへのいざない」（一九七〇年）

圏外の精神 フーゴ・シュハート（一九七〇年）

全五冊からなるこの論文集には、このあとに、『日本語系統論の諸問題』『言語文化の諸相』『日本語史の研究』（上）（下）とつづくことになっており、本書はそのはじめにあって、著者の基本的な研究姿勢がしめされているとみてよいであろう。

なお、このシリーズが『論文集』となづけられたについては、「著者あとがき」にのべられたところの、つぎのようなかんがえがえしたがその背景になっているとかんがえられる。

「著者あとがき」にのべられたところの、つぎのようなかんがえがえしたがその背景になっているとかんがえられる。それは、学問の労作が体系のよそおいをととのえた成書の形をとることを否定はしないけれども、真の学問研究の生命はモノグラフを自己目的とする論文にあるということである。（p.33）

したがって、みぎの諸篇は、それぞれ独立の完結した論文であるが、このようにあつてみれば、全体が、やはりそれなりのまとまりをもっている。それは、この著者が、言語ないし言語学に対して、どのような態度でのぞんできたかということと、密接な関連をもっているとみるべきであろう。

巻頭に河野六郎氏による序文がある。おなじく言語研究にたずさわる年来の知友のたちばから、この著者の学究としての本領を、するどく、しかもあたたかくえがいたもので、まさに、しるひとぞしるという感のふかい名文である。この著者について、それ以上、ここにつけくわえるべきことはなにもない。冒頭にしろしたところとの関連においていうならば、河野氏は、「圏外の精神」の論文について、「正しく庄巻といふべきであらう」として、つぎのようにのべている。

亀井君はシュハートに名を藉りてそこに自らを語っている。彼の言葉を借りていうならば、「かれはそのゆたかなちえの珠玉をひとり心おもむくままにあたりへばらまいたひととして、これを一口にいえば、非体系的なところこそ、その身上なのである。かれの活動をそのすみずみまでよく理解して包容しようよなひとはきわめて得がたいままにかれはその生涯をつらぬいて来た。彼こそ正しく「圏外の」、そして孤高の精神である。

片言隻句といえどもおろそかにしないこの著者による命名であるから、『日本語学のために』という本書の標題は、もとより、『国語学のために』と同一義ではない。この標題は、おそらく、第一の論文からとられたものであろうが、この論文においては『国語学』という呼称、——ないしその呼称によってわくづけられているところの学問のありかた——に対して、つよい反撓が表明されている。それは、用語上のこのみというような末梢的なことではなく、日本語の言語学的研究の指導原理がいかにあるべきにかかわる、重大なことがらなのである。

明確な定義のもとにもちいられるかぎり、それがどのような名称をもってよばれようとさしつかえないというかんがえかたは、ただしくない、とこの著者はかんがえている。やはり、〈名は実の實〉ということからいって、あやまった方向性をもつような術語はあらためられることがぞましい。『国語学』も、それを『日本語学』と改称することによって、抜本的な体質改善がなされなければならぬというのが、その論文の趣旨なのである。対象となるところの日本語の、その歴史的な性格を凝視し、それに即して、国学の伝統

の墨守でもなく、また、欧米の言語学の皮相な応用でもないところの、日本語研究の方法が樹立されるためには、なによりもそのような脱皮が必要であるという意味で、この著者は、「この国語学もやはり棄ててしまいたい名称だと思ふ」(p.14)と主張している。

この論文が公表されたのは、一九三八年であるから、もはや、三十有余年を経過していることになる。そして、それ以後も、この著者は、『国語学』という呼称にこだわりつづけているのである。

「国語問題と国語学」においては、みずからをも「国語学徒」のひとりにかぞえているようであるし、また、「日本語とその研究との背景」のなかでは、

日本人にとつても、「日本語」と「国語」との間には、もちろん、かなりいちじるしいニュアンスの相違があり、語、というものは、人間の意識をきわめて微妙に反映しがちです。術語をかへようとする試みは、無駄でした。(p.16)

とのべ、さらに、それに対して、つぎのような注がくわえられている。

わたくしは、この十五年間、国語学をしりぞけて、できれば、日本語学と変へたいものと考えてゐるが、一べん固定した因襲は、わたくしの力などではなかなか動かかせないものらしい。

(p.16)

しかしながら、この著者はそのような現実面に直面しても、けつして、妥協してしまつたわけではない。すなわち、「圏外の精神」において、

ロマンス語学とは、大学の課目であつて、そういう個別の学問があるわけではない。あるのはただひとつ、言語学そのものだ

けである。(p.294)

と「Schuchardt」のことばに関連して、つぎのようなかんがえかたをあきらかにしているのである。

大学をでたばかりのころのわかいわたくしは、このシュハートのことばをこのんだ。ロマンス語学でさえシュハートのいうがごとくである。まして、くぐ、がくなどというものはみとめがたいとわたくしはかんがえた。わたくしのかんがえは、そのとき以来かわっていない。そして帝國大学の教科目たる『国語学』に対していだいたわたくしのかんがえは、そのときに意識したとおりだしかつたと、いまもおもっている。(p.294)

「私は若き情熱を吐露し、以て国語学への手向としたい」として、二十代前半の著者は、「国語学よ、死して生れよ」(p.1)とさげび、そして、いままた、その論文集の初巻を、『日本語学のために』と題していることは、日本語についての研究領域を、言語学以外のいかなる原理によっても支配されることのないものとして、あらたにきずきあげようとする、——あるいは、あらためてきずきなおそうとする——この著者の意欲が、脈々とつづいていることをものがたっているとみるべきであらう。

この論文集を通読してのひとつのおどろきは、所収の諸論文の執筆時期に、三十年以上のはばがあるにもかかわらず、あたらしいものとふるいものとの差をほとんど感じさせないということである。

二十年・三十年という歳月は、特に、その期間における社会のほげしい変動と、学問の急速な進展ということからいって、けつしてみじかいものではない。それにもかかわらず、戦前にかかれた論文

が、ほとんどそのふるさを感じさせることなく、この一兩年につづられたところのそれと同様ののみずみずしさをもってわれわれにせまってくるというのは、不思議な感じさえするのである。かなづかいが新旧にまたがっており、また、用語や修辭の面でのかなり顕著なちがいがあるから、それをめやすにすれば、おおよその執筆年代は容易にすることができるが、論の内容をよんでゆくかぎり、そのたちばの一貫性には、まことにおどろくべきものがある。「著者あとがき」には、「文章の方はむかしよりずっとやわらかになっている」とのべられているが、それは、漢語の使用のしかたなどについていえるにしても、論理そのものは、いっこうに「やわらかに」などなっていないから、あくまでも、みかけのうえのことにすぎない。むしろ、やさしそうなみかけで、むずかしいことをかたっているだけに、最近のものの方が、かえって難解な感じになっているとさえ、いえなくもなさそうである。

三十年もまえの論文の生命が新鮮にたもちつづけられているということの理由としては、まずなによりも、この著者の透徹した論理と、その論理の背景をなしているところの哲学とをあげなければならぬであらう。展開される論理に、飛躍・屈折・逸脱がなく、また、その哲学は安易に時流にのつたり、あるいはまた、時流にながされたりするような浮薄なものではない。しかしながら、そこに主張されていることどもが、今日もなお、いわゆる学史的意義以上の現実的なたえのちからをもっているということについては、もうひとつの要因を指摘しておかなければならないであらう。それは、この著者によって論じられてきたところが、論そのものにそなわるおおきな説得力にもかかわらず、いわば、暖簾にうでおしとい

以上の効果ないし影響を、国語学の研究者たちにあたえていないという事実である。もし、かれらが、この著者のうったえにこそから共鳴し、そのような方向にむかって体質をかえようと努力してきたとするならば、これら一連の論文のおおくは、そのはたしおわった役わりが評価される時期にきているにちがいない。このようにすぐれた学者をいぬにたとえるのもふさわしくないが、結果として、それらは、と、おぼ、えにおわっているのである。つまり、これらの諸論は、国語学という鞏固なかべのそとがわからなされつづけてきたということになる。対象の姿勢がかわっていないために、つきくずしの姿勢もまたそのままにたもたれてきたといつてよい。これらの諸論は、国語学者たちからうけいられることもなく、また、反駁らしい反駁をくわえられることもなく、結果として無視されたようなかたちになっている。

みぎに、「結果として」といったことについては、ひとつのことわりが必要である。すなわち、それは、この著者の所論が、国語学の研究者たちによって、低水準のものとして評価されてきたがためではないのである。それどころか、この著者は、かれらのおおくから、最高の評価をえている学者のひとりであるといつても、ほとんど異論をみないであろう。現に、この著者による国語史の——といふよりも、そのたちばにしたがうならば、日本語史の——具体的な研究成果のおおくは、国語学のなかにすなおにとりいれられ、尊重されているのである。問題は、この著者が『国語学』と『言語学』という、ふたつのことなる領域を専攻しているとみとめられているところにあるとおもわれる。言語研究一般にかかわることがら言語学に属するものであって、国語学としては、この著者の、国語学

的な研究だけをとりあげればよいということになる。実際問題として、『言語学』にうとい国語学の研究者としては、よこ文字でその基礎がためられた一般論や原理論に、うっかりくちだしてできないという事情もある。そのような議論は、かれらから敬してとおざけられてきたのである。つまり、よびかけられたはずのあいては、それを、自分たちへのよびかけとしてうけとめなかつたということになる。「国語学よ死して生れよ」ときけんだこの著者には、日本語研究の将来に対するおおきな期待があつたとおもわれるが、国語学は、いっこうに、しにもしなかつたし、うまれかわりもしなかつた。国語学がそれなりの進歩・発展を上げたことは、この著者としても、みとめるにやぶさかでないであろうが、かれ自身のくりかえし主張してきたところの質的転換は、ついに、今日まで、なされるにいたっていないのである。

この著者のこれまでのあゆみをあとづけてみるならば、かれは、終始、国語学の圏外にあつたといふべきであろう。ここでわれわれ——つまり、いわゆる国語学の研究者たち——が真剣にかんがえてみなければならぬのは、この著者がみずからすすんで、国語学の圏外にみをおこうとした結果なのか、はたまた、その圏外にみをおかざるをえなかつたのかということである。それに対するこたえをみちびきだすためには、どうしても、かれがそのかがみとしてえらんだところの SCHUCHARDT の学問というものが問題になつてくる。

はじめにのべたとおり、SCHUCHARDT について、わたくしは、この著者によってかたられたところ以上の知識をほとんどもちあわ

せていないが、すくなくとも、言語学史に関する通行の諸書をひもどいてみたかぎりでは、それぞれにそのとりあつかいかたがちがっているものの、ともかく、かれが、当時の言語学の主流からはなれた、どの学派にも属さない学者として位置づけられている点において共通している。

Hugo Schuchardt-Brevier についていえば、わたくしはその表紙すらもみたことがない。この書評を執筆する責任上、その Brevier なるものをさがしだして、ひとめみておくべきかともおもったが、かんがえなおしてそれをやめた。さがしさえすれば、比較的てぢかなところ——といっても、それが国語学研究室にあらうはずもないが、——にもとめえたのかもしれないか、そのようなものを、ただ瞥見しただけで〈評者未見〉をまぬがるべきではないとおもったからである。その内容を、わたくし程度の知識をもって理解することは、とうてい不可能にちがいない。かりに、それが多少理解できたとしたところで、ここでは、SCHUCHARDT が、まさにこの著者のいうとおりの学者であるということを追認してみたり、あるいはまた、この著者の評価のしかたに部分的な修正が必要ではないかというようなことをいって見たところで、どうにもならないのである。たいせつなことは、かれが SCHUCHARDT をもって〈圏外の精神〉をもつてつらぬいたところの学者の典型とみなし、みずからの学問のありかたと SCHUCHARDT のそれとのあいだに、根柢においてつながるものをみだしているという、ただその事実だけなのである。ここでは、SCHUCHARDT をかがみとして、この著者自身の学問がうつしだされているのであるから、その意味において、ここにえがかれているところの SCHUCHARDT 像は、その細部にいたるま

で、ことごとくだだしいとってさしつかえないであろう。そのただしきは、ちょうど、一粒のすなのなかにひとつの世界をみだした詩人のそれにとえることができるかもしれない。

「個性をぬきに学問の進歩はかんがえられぬ」(p. 302) という SCHUCHARDT のことばを引用して、この著者は、「学派とは偏頗のことである」(p. 303) といっている。したがって、もし、この著者によって主張されたところが、すなおに国語学の研究者たちにうけいれられていたとしても、かれが、みずから、亀井学派の領袖におさまってしまうようなことは、けっしておこりえなかつたはずである。

しかしながら、それはそれとして、国語学の研究者たちが、このすぐれた言語学者のいうところにみみをかたむけようとせず、これまで、かれを、国語学の圏外において孤高をまもらしめてきたのは、まことにおしむべきことであつた。科学は私的な学説ではありえないという理由から、——したがって、それは、SCHUCHARDT とまったく根柢がことなっているが、J. BLOOMFIELD もまた、学派というものを極端にきらったにもかかわらず\*、その周囲に、結局、「BLOOMFIELD 学派」がひとりできあがつてしまつたことなどをかんがえあわせるならば、そこには、われわれにとつての、おおきな問題があるようにおもわれる。

わたくしのむねを、ふとよぎるのは、この著者のこのころのかたすみにも、ことによると、一抹のさびしさのようなものがあるのではないかということである。「圏外の精神」のなかの左の一節は、そのことを暗示しているようにおもわれてならない。

好意をもってじぶんの学問の活動をみわたしてもらえらば、けっして気まぐれにちこびよんびよんはねまわってくらしていたのではないことをひととはわかってくれるであろうと期待する。さすらいの旅にあってそのさいこの目あてをけっしてみうしなっていないかった、と。かれはひとにじぶんが言語学そのものを目ざしていることをみとめてもらいたかったらしう。(p.293-4)

この著者の業績のひろがりをよくしるひとにとつては、このことばの意味が、いたいほどよくわかるはずである。孤高が孤独につうじるとしたら、それは周囲の責任でもある。

〈圏外の精神〉をとりあげただけで、書評にあたえられた紙数はつきようとしている。De SAUSSUREの学説をめぐること著者のかんがえかたなど、とりあげたい問題は、いくらものこされているが、すべて割愛せざるをえない。

この書評が、かなり極端なかたよりをもっていることを、わたくしは、あえて否定しない。それにはそれなりの理由があるからである。

一般に、書評の執筆者は、著者と同等以上の学識をそなえていなければならぬし、そのうえに、著者とはある程度 disposition をことにしていることがのぞましいようにおもう。ところが、いまのばあい、わたくしは、みぎの両条件において、ともに欠格なのである。研究者としての資質において雲泥のひらきがあるにもかかわらず、その気質において、わたくしは、この著者のそれと、一脈以上

に、あいつうじるものをもっているようにおもう。どのようなことがたいせつであるかとかんがえる、その価値基準をひとしくするために、この著者によってとかれるところは、わたくしのこころの琴線に敏感に共鳴するのである。資質・力量の差をそのままに反映して、その共鳴は、ことごとく礼賛の辞になってしまふ。

個人的なことをいえば、この著者は、わたくしが、わかい時代から私淑し、ついで師事することをえた学者であり、したがって、わたくしにとつては、亀井先生にはかならないのである。亀井孝をしることが、かれのりこえることであるとしたら (p.159)、この著者は、とうてい、わたくしなどのでのどかないところにいる。

いかなる学的成果も完璧ではありえないという意味において、この論文集のなかの諸論にもかかわらずの不完全さがふくまれており、また、そこにこそ、飛躍的な発展への契機がひそんでいるのであろう。しかしながら、それらを的確に指摘することは、わたくしの能力をこえており、それぞれの読者の識見に期待するほかはない。ただ、ここに強調的にいいそえておきたいのは、たとえこの書評がまったくのやぶにらみであったにしても、ともかく、本書そのものは、すべての国語学の研究者が熟読玩味すべものをもっているということである。反論は、この著者のおおいに歓迎するところであろうが、ともかく、このようにすぐれた論考を、事実上、ふたたびねむらせてしまうようなことがあってはならない。それは、日本語学の将来にとって、かけがえのない損失である。

ふでをおくにあたって、著者の健康のすみやかな恢復を、日本語学の進展のためにも、ここからいのりたう。

\* Charles C. Fries: The Bloomfield "School". *Trends in European and American Linguistics 1930-1960*. Antwerp, 1961.

(昭和四六年六月発行、吉川弘文館、A 5 版、三一九ページ、二五〇〇頁)

前ページ上段に、de Saussure の学説をめぐる、この著者のかんがえかたについてとりあげてみたかったということをのべた。それは、*Cours* を中心において、この著者と時枝誠記氏との基本的な対比を試みるならば、国語学というものの性格が明確なかたちでうかがひあがり、したがって、この著者によって、くりかえし主張されているところの趣旨もまた、より捕捉しやすくなるとかんがえられるからである。

ここでは、問題を提起するにとどめざるをえないが、評者自身としても興味のあることがらなので、それについての私見を、別にまとめ、批評をおおきたいとかがんがえている。(初校にあたって)

——東京教育大学助教授——